

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、令和3、4年度はオンラインのみの活動だったが、令和5年度は、毎月の部会、研究部ワークショップ(8月)、研究発表会・公開授業(2月)のいずれも対面で実施した。

1 例月の部会

4月から例月の部会を対面で12回実施した。5～9月に部員2名ずつが語彙指導に関する実践発表をするなど、対面ならではの研究活動を行った。部内で意見交換、情報共有が円滑に行うこともできた。8月に「研究部ワークショップ」の運営準備、12月に研究冊子の校正作業のための部会を別途行った。

2 第20回 研究部ワークショップ

8月1日に対面(会場:大田区立志茂田中学校)、4日にオンラインで実施した。対面実施は4年振りであり、約100名の参加者あった。オンラインでは150名を超える参加者があり、都外からの参加者もあった。内容は、1日目:①「生徒が主体的に授業に参加するための工夫」、②「練習量を増やす工夫」、③「思考力・判断力・表現力の育成～小中高連携を意識して」2日目 ①「即興で話す力を高める実践」、②「主体的に学習に取り組む態度の評価」、③「中学での語彙指導をあらためて考える」。計8名の研究部員が実践発表を行った。対面では参加者同士による意見交換の機会を設定することができた。オンラインでは、遠方からの参加者のニーズにこたえることができた。

3 研究内容:「研究部推奨語い1800」に基づく語彙指導実践例

「生徒が英語で書きたかったけれども書けなかった日本語」

令和3年度に発表した「研究部中学校推奨語い1800」を活用し、研究部員が日頃の授業で行っている語彙指導の実践を、毎月の部会で相互に紹介(プレゼンテーションやマイクロティーチング)し、部内での議論を重ねて、指導法の改善を図った。受容語彙・発信語彙の観点から、それらの指導法について、Nation(2001)の“What is involved in knowing a word?”を参照し、語形(Form)・語義(Meaning)・使用(Use)のどれにあたるかを明確に分類した。また、令和4年度の研究で、生徒が書くことの活動において「英語で書きたかったけれども書けなかった日本語」を9つのトピック別に紹介した。令和5年度は、中学生が書いた作文で使われたそれらの語彙を分析し、その結果を報告した。

4 研究発表会・公開授業 および研究冊子「語いと英語教育(46)」発行

2月22日に渋谷区立松濤中学校にて、4年振りに対面で研究発表会と公開授業を実施した。4年振りに対面の公開授業は、同校の体育館で実施し、研究部員の橋本晋作 主幹教諭が授業を行った。研究発表では、テーマに基づく、1年間の研究内容を発表した。指導・助言者として、三浦幸子先生(都留文科大学教授)に授業と研究内容についての指導・助言をいただくとともに、「教師・生徒間のインターアクション: F-Move と教師の役割」をテーマにご講演をいただいた。

また、研究部研究冊子「語いと英語教育(46)」を研究発表会・公開授業の日に発行した。紙媒体による発行は行わず、都中英研のウェブサイトに掲載する形で発行した。

(研究部長 文京区立本郷台中学校 溪内 明)